

上演を振り返って

「30分以内、大ホール特設ステージで上演する」この条件のもと、各団体が3つのブロックに分かれ連続上演しました。演劇祭実行委員の皆さんが高松委員長を筆頭に協力しあい、本当によく動かれていたように思います。毎年実施してきた演劇企画が試行錯誤の末、今年またひとまわり大きく花開いたのではないのでしょうか。単日開催においては最高の成果だったと思います。

さて、演劇の上演について述べます。台本の表紙にはタイトルと作者名が書かれ、次のページに登場人物表が載っているものです。これが徹底されていない台本が多かったと思います。審査員のためではなく、作品と一緒に創り上げる出演者とスタッフのために、人物の年齢や職業、立場、家族関係などの手がかりを簡単にでも載せていただきたいです。イメージをすり合わせ、わくわくしながら稽古を重ねるために、一番簡単に出来ることだと考えます。

セットチェンジについて。劇中、明転でイスをさっと置くなど数秒なら問題ありませんが、30分の持ち時間の中で場面転換に時間をかけるのは退屈のモトだと考えていいと思います。いかに退屈な時間を省くか、に腐心してほしい上演がありました。

各上演について触れますが、脚本にも言及します。今さら脚本上の課題を述べても脚本家個人の問題と思われるかもしれませんが、大きな劇団の分業制ではないので、出演者やスタッフが一緒になって課題を共有出来たらステキです。また、脚本理解が彩り豊かな演技、優れたスタッフワークにつながりますので、ぜひ目を通してもらいたいと思います。

A-1 きみどなり『pictured』

「嘘でも本当でも表情は多くのメッセージを発する」だから表情を大切に扱ってほしい。前髪で顔を覆っていたり、照明が顔に当たっていなかったりして、演出の目が行き届いていたのだろうか。演技は出演者ふたりとも肩の力が抜けた自然体だった。ただ、地べたの演技自体は悪くないが、最前列の観客しか見えない位置で演技するのはもったいない。スタッフも気づいたら演出に伝えたほうが、芝居は断然生きるだろう。就活を控えた美鶴は中学時代の友人・藍子の家を訪れる。卒業アルバムを見て過去を懐かしむが、美鶴がかつて藍子を裏切っていた真実が浮かび上がる。藍子は現実から逃避するように、理想の美鶴が描かれた絵と添い寝する。静かで狂気に満ちた結末が美しく感じられた。キャンパスの絵も力作で、じらされた末にようやく目にする演出法は優れていた。ならば徹頭徹尾、何かがじらされ、見たいものが最後まで塗り重ねられる見せ方でも良かった。演出は中心線が何か、はっきりしたロジックが必要。秀逸なタイトルだけに、塗り重ねられた美しさと捉えられず、写真と絵というモチーフの関連が弱いと誤読されると不本意。観客の解釈を想定し演出のロジックを立てるべきと考えた。見せたかったものの焦点がぼやけていないか、常にチェックが必要だ。音の使い方は学びの余白がある。SEを使うなら終始こだわっていい。視覚に対して聴覚を持て余した。指摘が多くなったが、総じて関心をかき立てられる作品だった。

A-2 福岡教育大学演劇部『灰、よろこんで』

ダンス部部長を務める真白は頼まれ事を断れず、本音を押し殺して生きていた。そこに分身であるカイが現れる。友人の彩花との衝突を経て、真白の心の葛藤と再生が描かれる。カイがもっと解放された存在であってほしかった。加えて、狂言回しの役割も持たせると良かった。お客自身の心をリラックスさせ、場の空気を楽しめれば良いが、出演者の体が緊張と弛緩を操れなければその理想には届かない。例えばダンスの振りを真似して転ぶ場面では、本当にバランスを崩して倒れる必要がある。難しいが、目の前で起こることは真実でないとお客は興ざめする。ライブという表現手段をもっと考えていきたい。ただ、表情が無理やり作ったものでなく自然に伝わる細やかさは良かったし、真白の眉毛の太さでキャラクターが伝わったりもする。ぜひメイクや衣装にも楽しみを与えてほしい。最後に、心の葛藤がよく表れていた上演だったので、チェーホフの『三人姉妹』の面白さが分かる人たちではないかと思えた。一度手にとってみてほしい。

A-3 SECOND Bell『先生トイレ！！』

大雨で休校となった日に教室に残された小学5年生の4人が、担任教師は秘密組織「T.O.I.L.E.T.」の一員

ではないかと疑う展開。前思春期と言われる年代の子どもたちを登場させたのが秀逸だった。そして涉(人物)が発した「先生トイレ！」に教師が「先生はトイレではありません」と返すことから、面白さが一気に加速する。この1アイデアで作品は成功している。現在テレビ放映中の「VIVANT」を真似たのかと上演後に尋ねたが、全く知らなかったと言う。まさにシンクロニシティだが、話題が沸騰した人気ドラマくらいはチェックしておいても良かった。審査員も観客投票も高評価だったように思うが、登場人物たちの身体性が高く、動きを見て爽快感を感じられたことが大きい。いい芝居はロングセラーのいい絵本に通じる。いい絵本は絵だけ見ても様子が分かり面白いと感じるもの。演劇における身体性の重要さとつながっている。この上演にはそれがあった。ただ惜しむべくは、出演者のセリフ回しの精度が低く、稽古不足ではないかと感じた。持ち前のセンスを上回る努力があってもいい。スタッフ側では、舞台美術の色や素材の質感をもっと統一できるし、音響はブリッジを入れ無駄な時間を無くす工夫も検討してほしい。全体としては楽しい時間となり、舞台の面白さがぎゅっと詰まっていた。

B-1 gekid『リライト』

スランプに陥った漫画家志望の主人公が、現実と想像の間で葛藤しながらリライトしていく物語。演劇は心情を語り続けると役者に動きがなくなり退屈になる。脚本とは、人間の退屈を取り除いた営みのスケッチだと分かっているほうが、物語の停滞を防ぐ。そして「チャップリンのステッキ」をお勧めする。1910年代にアメリカに渡ったチャップリンは、上下矛盾した服装を纏い、ステッキを持った。コメディアンはたくさんいたが、ステッキを持った者は初めてだった。ひと工夫加えることで彼は世界の喜劇王となった。演出的には、こんなくだらない世界をぶっ壊したいなら、想像力をもって観念ではなく目の前に描いてほしかった。本当の苦しさや絶望を味わった時、人間はどうするのか。人間観察をもとに大胆な演出を施してほしい。また、室内なのに人物が靴を履いているという嘘の処理や、衣装の色合い・素材のバランスを見るのも演出家の仕事。学生演劇なら、芝居についてのミーティングを重ねることも大事ではないだろうか。その気づきが芝居を一段上等なものにしてくれるのだから。

B-2 九州産業大学 劇団テスカトル『ちょこらーじゅ』

花火によって宇宙船を撃ち落とされ、転校生として地球の学校に潜入した宇宙人と、自称宇宙人の少女との交流を描いた物語。この少女・大葉ナナ役の出演者の演技が才能に溢れていた。そしてコラージュとは絵画の技法で貼り付けを用いるものだが、イメージの混乱はなく味付けが大変良かった。既存の社会の枠組みから外れたところで、自分を対等に扱ってくれる理解者を求める生き方が、スピーディーに鮮やかに描かれていた。ほかにも表現豊かなタレントぞろい出演陣が芝居をぐいぐい引っ張った。人物が魅力的に描かれ、演者が持つ自意識とイメージの出し方のバランスも見事だった。演出の力にも秀でたものを感じた。ラストの盛り上がりで音楽をかけないのは観客の感性を信じているからだが、勇気のいる判断で卓越していた。あえて注文するなら、板付きから始まるルールは無いため、オープニングこそ強い印象を与える演出が出来たのではないか。しかし上質な舞台だった。異星人と地球人の奇妙な交流を描いた喜劇だが、文明の相違や人間的孤独を内包した哀しさが確かにあった。

B-3 ぽっとでごー『観覧車の下で会いましょう／幕間劇：荒野のひとりぼっち』

30分一幕という条件なのに、幕間劇を入れるという発想に興味があった。しかし今回、それが混乱以外に良いものを生んだのか、私には想像の糸でつなぐことが出来なかった。遊園地経営で苦しむ夫と看護師の妻の対話劇。ふたりの心の渇きや絶望を荒れ果てた大地と繋げたかったということか。いや、幕間劇だから関係なく見てというのであれば事前の説明が必要だった。本編ラストでは夫婦はソファに寄り添い、静かに永遠の眠りにつく。希望の無い芝居は観客にどう映るのだろうか。私は10年に1度この作品を見る。そして皮肉にもイメージが焼き付けられるという点ではいいが、演劇は生きているお客と共に進みゆくものだと考えるとやはり割り切れない。むしろ永遠の眠りが話のスタートで、再び人物が動き出す趣向くらいがいい。役者について一言。誠実に演じる姿勢は大変良かった。ただ、夫の場合、遊園地を経営する人に会うのは難しいため、せめて高額のお金を動かす職にある人を調べ、その振る舞いや話し方を取り入れるといいと思った。妻は看護師の職業性を、対話のキャッチボールをしながら構築していくと、精神的強さと包容力のバランスがうまくいっただろう。演出の立場の人だけでな

く、チーム全員で「イメージをすり合わせる」作業、つまり風通しの良い創造的意見交換をもっと活発にやってもいいと考える。赤電話やオルゴール音は印象に残った。アイデアを出し合ってクリエイティブな作業をするのは楽しいだろうと想像した。

C-1 学生劇団「いと」～Italento～『舞台的現実感が吐き気を催させる』

芸術に挑む異常な執着を持つ脚本家の舞台に、俳優の男が挑む。その中で虚構と現実の境界が崩壊する。筋道が通らない、道理に合わないテイストの演劇を「不条理演劇」と称するが、この作品はそうか。脚本家自身の整理されていない観念や葛藤が入り込み過ぎていないだろうか。後半、男は降板させられ、彼の恋人が「自意識という糸を切られた人形」となり、脚本家は狂氣的に歓喜する。観客が信じている「正しさ」や「人権的配慮」という既存の枠組みを揺さぶり、安易な娯楽に逃げないことが意図だったのだろうか。女性の希望やビジョンを描くことが目的ではないのは分かるが、脚本家と演出家が共に女性であり、あえてこの設定にしたのか。自我や身体感覚ともっと向き合う必要があったのでは。つまり、心身の観察力をもっと発動し、自意識が低く機械的な役割をこなす存在としての人間を、より魅力的に描けたはず。チェーホフを再び持ち出して恐縮だが、『かもめ』のニーナとトレプレフのやりとりを一読してみしてほしい。必ずヒントになる。音響のBGMの扱いが丁寧で、舞台の雰囲気づくりに一役買った。ひとつの創作チームとして芝居作りに向かう姿勢はすばらしかったので、観察と舞台技術が今後試されるだろう。

C-2 劇団びゃくだ『チャイムちやいむチャイム』

学校のチャイムや教会の鐘、店の呼び出し音。それぞれの場所で鳴り響く音が人生の節目を象徴し、滑稽だが懸命に生きる人間たちの心の機微を描いた物語。「人生は何度でもやり直せる」というテーマ性に、絵本「百万回生きた猫」の世界を思い出した。出演者たちの動き、演技が30分間ずっと面白く、演出の細かな気配り目配りも秀でている。シュールな言葉遊びやナンセンスなやり取りを出演者たちがちゃんと理解し、丁寧に稽古を重ねた証明としての本番が見てとれた。物語は最終的に、父、娘、叔母という家族へ収束される。古今東西の物語の大部分は家族の物語であるように。そして心地よいタイミングで鳴るチャイムに導かれ、明日へ向かう家族の姿に観る者は励まされる。賞がかかる演劇祭では喜劇的な作品が支持される面もあると思うが、今回そこに裏打ちされた現代人の哀愁が表現されていた点がすばらしかった。照明と音響の効果を再点検し、この舞台の面白さを更に広げてほしい。

C-3 北九州市立大学 演劇研究会『un- 私たちに向き合った顔』

転校生の純佳は、「規律と調和」を重んじるスマホの音が支配する奇妙な学校へやってくる。顔を白い布で覆った「A」との対話から、自由や自然を求める気持ちと「スペクタクル（虚構の景色）」として統合や融合されている世界との葛藤・対立が見えてくる。この原稿執筆は上演から二週間たっているが、記憶に残る場面が多い。不条理的な演劇であっても混乱せず表現が伝わる。実際に人間の呼吸音が聞こえるライブで味わう価値が高い作品だと言える。純佳役の役者の演技が細やかですばらしかった。さらに彼女を中心に対話劇としての見応えもあり、全員で成し得た成果と自信だと受容していい。照明や音響もこの「同調圧力の苦しさ」や「非合理的世界の静謐さ」をよく理解し、派手な色みや安易な曲調に頼らず貢献していた。かえって30分という短編ではなく、2時間ほどの無言劇のような設定のほうが、もっと作品の良さが構築できるのかもしれない。それほど創り出したこの作品世界が、心象風景と衝動をうまく混ざり合わせ、魅力たっぷりのスペクタクルとして見せてくれた。演技の技術として大事なものは、上半身は自由を得られるようリラックスし、下半身は響きと説得力のある発声ができるよう安定していること。それを感じさせてくれる舞台でもあった。